

戸惑う患者から 賢い患者になるための道案内

④子どもの受診 その2：子どもの力を引き出すかわり

佐久大学・看護学部教授 鈴木千衣^{ちえ}

今回は、お子様の視点から、受診という体験を考えてみたいと思います。

大人の方でも、「病院」と聞くと、「嫌なこと、痛いことをされるところ」といったイメージを持たれることでしょう。生活体験の少ない子どもたちにとってはなおさらのことです。子どもたちは、知らないところに連れていかれると、緊張から親御さんの元から離れようとせず、周りを観察して「ここは大丈夫」と安心できると、親御さんから離れて行動できるようになります。

病院という場所は、子どもたちにとって「見知らぬところ」であり、「見慣れない人たち（医療者）」がいるところで、病院に一步はいった時点で緊張が始まります。そして、「痛いこと、嫌なこと」である診察、検査、治療等子どもが乗り越えなければならないことがたくさん待っています。

この体験をうまく子どもが乗り越えるためには、いくつかの手助けが必要です。

①病院に行くこと、病院ですることをお子様に説明しましょう。嘘をついてつれていくのは避けてください。

お子様の予防接種で来院されるときなどに、何も話されずに来られる親御さんがいらっしゃいます。子どもは診察室に入って初めて、注射されるという事実を知り混乱し、泣いて暴れることになります。きっと、親御さんは「注射するよ」というと、嫌がって病院に行かなくなることを心配していらっしゃるのだと思います。しかし、来院される子どもたちを見てみると、「ちっくんするよ（注射するよ）、一緒に頑張ろう」と説明すれば、頑張れる子どもが結構多いです。たしかに、中には、説明されて泣くお子さんもいます。でも、何も話されなかったり、嘘をつかれた場合、子どもの心の傷は大きくなります。そして、次の同じような機会での恐怖体験はさらに増すことになります。

したがって、どんなことをするのかわかる範囲で伝えておくことが大事です。「先生が、モシモシ（胸の診察）するよ」、「お口を大きくアーンってするよ

（喉の診察）」というように子どもにわかるように説明してください。「注射をするよ」と話したら行かなくなるのではと心配があるときには、病院に着いた時点でお話ししてください。そして診察後には、頑張ったことをたくさん褒めてあげてください。

②子どもの好きなおもちゃなどを持参しましょう。

クリニックや外来での待ち時間は長いことが多いです。待っている間、子どもは緊張しています。その緊張を少しでも緩和するために、お子さんの好きな遊び道具を持っていくと助けになると思います。

③お子様ができることはできるだけ見守りましょう

お子様が病気になると、親御さんは自責の思いを持たれる方が多いようです。特に、長期に渡って内服等の治療が必要な病気になると、その思いは強く、お子様を不憫に感じ、どうしてもいろいろしてあげたくなります。しかし、お子様が家庭外の生活を始めると、親御さんの目がどうしても届かないところが出てきます。そうすると、お子様自身が対応していかなければなりません。そのため、お子様自身の力を育むというのも大事なことです。お子様が自分で生活行動ができるようになったら、療養行動についても少しずつ自分でできるようにサポートしてあげてください。たとえば、診察の場面では、お子さん自身が自分の事について、少しずつ医師に伝えられるようになるよう見守っていきましょう。

かつて、お子さんに何も伝えずに病院いらした親御さんが、お子さんが看護師の説明を一生懸命聞いて採血を泣かずに受けたのを見て、「うちの子がこんなに頑張れるなんて思ってもみなかった」とお話しされたことがありました。子どもたちはご両親の知らないところで子どもなりにいろんな体験をして力をつけています。子どもたちのそんな力を引き出しながら援助していききたいものです。

